

PLANET LIFE

http://caramelplanet.xxxxxxx.jp/

PLANET ZERO
INFORMATION PRESS
110206 ASAKUSA TRIUMPH
MAILADD : ai@planetzero.halfmoon.jp

GIANTKILLINGオンリーです！わあ！GKではじめての東京イベント！はじめてのオンリー！ぞらモーテンションあがりまくりです。あ、セラサクやらせてもらってます鷹村です。サーフルチェックの段階からすでにうきうきでした。多分今がうきうきMAXかだと思います。いい狩りがしたい、です。今日は一体何人の素敵なお嬢さんと世良に会えるのだろう。わくわく。セックスのオンリーだし、ハレンタインも近いのでハレンタインネタのSSなどをこあいざつわりじ。みなさま、よい狩りを！

CHOCOLATE GUNS

「あ、世良くん、ちょっといいとききた。こっちこっち」
クラブハウスに忘れ物を取りに来たところを広報に捕まった。
「なんスか？ 有里さん。俺、この後予定あるんスけど」
「ごめんごめん、ちょっとだけ。いいことだから」
元気な広報はにやにやしながら世良を引っ張って事務所に連れていく。
(この後、塚さんと約束あんの)
本当はタベ会はずだったのだが「明日にしてくれ」と一方的に言われて流れた。
(今日練習オフなのに、オフ前夜だったのに)
いろいろ計画していた身としては、ショックで忘れ物だつてするというもの。
今日はリベンジのつもりでいる。釣り餌に用意したのはETUのライブリからダビングしてもらった達海が出演している代表試合のDVDだ。
代表のゲームメイクまで司っていた男のプレイは記憶にはあるものの子細まで覚えているわけではない。達海体制2年目のシーズンを迎えるにあたって、一度くらいちゃんと観ておくのもいいかもしれない、思った。
(それは、本当)
塚を誘ったのはもちろん下心があるからだ。向こうだって世良が自宅に誘う意味を理解していないわけがない。と思う。
とはいえ、代替え日がオフの今日なら問題はない。

今日は……実を言えば今日の方が、昨日よりは世間的には圧倒的に特別な日だ。

「世良くん、聞いてる？」
ぼんやりそんなことを考えていたら、有里の最初の方の言葉を聞き逃していたらしい。
「あ、すみませ……って、これ、なんスか？」
示された段ボール箱には、でかかどと「世良」と自分の名前が書かれた紙が貼ってあり、色とりどりのきれいな包みが山盛りいっぱいになっている。
思わず有里を見ると、にっこり微笑み返された。
「これ、今日までに届いている世良くんへのハレンタインのプレゼント。まあ、明日以降もまだくるとは思うけど、一応ね。去年と比べたら10倍ももっとかも」
「う……わぁ……」
赤、青、黄……きらきらと輝くラッピングに目がくらみそうだ。
「すげえ……これ、俺にとって、マジスか？」
「マジ、マジ。世良くん去年大活躍だったしね。まあ、妥当でしょうこれくらい」
まるで自分がもらったかのように、自慢げに有里が胸を張った。
「仕分けはこれからだから手紙やカードはともかく、モノを全部渡すのムリだしね。写真撮って見せるつもりだったけどこーいうのって実際見た方がうれしいじゃない？」
「あざーっ！ すげえ、今あがりました」
そして、同じ室内にある他の段ボールに目をやる。
「……今年は一気に総量増えたわー。やっぱりチーム活躍すると違うわ」

有里はやっぱりにここにこだ。
「こう見るとやっぱ、コジさんが一番なんスね……4箱ってすげえ。王子宛のが案外ないのが意外っス」
ジーが当然一番獲得数は多いと思っていたのだが、段ボール1箱に収まっている。
有里は苦笑して首を振った。
「王子のは別室。多すぎて他の選手と一緒に仕分けられないから、先に王子とそれ以外に分けたのよ。そこにあるのは仕分け漏れ分。今年は最高記録あさっり更新よ。面白いからプレゼントの山パックに明日撮影させてもらつつもり」
「ああ……そッスか」
世良は苦笑した。さすがにETUのファンタジスタは違う。それから横目で、その人の名前を探す。
(うわあ……俺の、倍くらい?)
男のサガで、どうしても数量勝負を無意識にしてしまう。
「塚さんのファンの人って、なんか美人が多いよねえ」
「うえ？」
有里がふむふむと頷きながら言う。どうやら世良の視線がその名前を捉えていることに気付かれてしまったらしい。
「王子のファンは多すぎているんなのがあるけど、塚さんファンはなんかこう、こんな人がサッカー選手にわざわざチョコ届けにきちゃうの? って感じのタイプ各種取りそろえてます、って感じ」
つまり、個のレベルが高い。
そう思うとラッピングが他の箱のそれらよりもぐっと上品で高価そうに見える。
敵は多い。
(いやいや、負けんな俺)
心の中でぐっと拳を握りしめ、世良は「じゃ、俺もう行きますんで。あざっした」と頭を下げた。
「あとでハレンタインプレゼントくれたサポーターへのコメント。みんなにアンケート用紙回すから手書きでちょうだいね」
有里の声が後から追ってくる。
自分あてのチョコはものすごくうれしかったが、塚ファンのお話を聞いてしまったのは少し余計だったかなと思っただ。
(平気、平気。この後塚さん来るんだし。一緒に監督のDVD観て、メン食うんだ)
すぐしよげそうになるのは自分の悪いワセだ。
マンションの自分の部屋まではエレベーターである。扉が開くタイミングで吹っ切ろうと、決めた。
(1,2,3……っ！)
一回、目を強くつぶってベルのタイミングで開く。
「……わ」
「わ、じゃねえよ。どこ行ってたんだよ世良」
塚が目の前に、それはそれは仏頂面で携帯を片手に立っていた。今にも世良にクレーム電話をいれるところだったらしい。
「な、なんでいるんスか？ 塚さん……」
約束まではあと2時間はある。どうしてここに今、塚がいるのかわからずに世良はそう尋ねた。
「なんでじゃねえよ。今、何時だよ？」
「……10時、50分」

「社会人なら、10分前集合が常識だろ」
大真面目な顔をして塚は言った。
「え……でもまだ2時間以上あるんスけど……約束した時間」
「何言ってんだ？ 11時だろ？」
「……いえ。1時ッス」
一瞬イヤな空気が流れた。
「11時だ」
「1時ッス。昨日、昼メシ時間ずれますけどどうするッスか？」
って訊いてるし」
昨日のあわただしい会話を思い出して世良は言う。
「……」
塚の表情がゆらめく。どうやら思い出してもらえたみたいだ。だが、そこを指摘して勝ち誇ると、最終的に後悔するのは世良だとわかりきっている。
それで、あわてて話を逸らす。
「あ、でも待たせちゃったのは同じッスよね？ すんません。ちょっと、クラブハウスに忘れ物取りに行ってたんで」
今日は貴重なオフで、約束よりも2時間も早くに塚が来てくれることに何の文句があるわけもないのだ。思っていたより2時間も長く塚といられる。
「忘れ物……」
「ッス……えーと、そんなたいしたもんじゃないんスけど。あ、これ昼メシッスね？ すげえ、なんスか？」
「ああ……チラン寿司だ。それと、あなごだけ別に焼いてもってきた。吸い物はインスタントだけだな」
「おー、美味そう。塚さんグルメッスよね」
「どうせ食うなら美味しいものがない、ってただけだ」
連れだって世良の部屋にあがる。
タベとりあえず片づけておいたが、塚は「相変わらず汚ね一部屋だな」と辛口評価だ。
それでもローソファの右側にちゃんと座ってくれる。世良は自分の部屋に収まる塚を見てにきまりした。
「さっき、クラブハウス寄ってきたって言ったじゃないスか。有里さんに俺宛のハレンタインのプレゼント見せてもらいました」
「……ああ、たくさんきてたか？」
塚はチラン寿司を世良のもってきた取り分け皿に盛りつけながら言った。
世良は碗に粉末を溶いただけの吸い物を並べながら苦笑する。
「塚さんのが多かったッス。しかも、なんか高そうだったし」
「ああいうのは値段じゃないだろ？」
「そうなんスけど……あと、有里さんが塚ファンはびっくりするような美人が多いって……言っていました」
ちらりと見ると、塚は心底あきれ果てたようにため息をつく。
「お前まばかか？ いくら美人だからってサポーターに手をつけられるわけないだろ？ ま、悪い気はしないけどな」
「いやあ、やっぱ俺のこはちょっと……ダイレクトで塚さんモテることか見ちゃって焦りますよ。なんか美人の本気チョコの数々にあてられたっていうか……」
何も反応を示さない塚にため息をつく、世良は降参してクラブハウスにわざわざ取りに行った荷物を持ってくる。
それはきれいにラッピングされた小さな包みだった。
ソファの隣に腰を下ろすと、神妙に塚に差し出した。
意外と緊張するものなのだな、と世良ははじめて知った。
「ええと……これ……塚さんあてのプレゼントの中にもるっけり同じ大きさで包装紙のチョコあったんで。既にかがってますけど……ハレンタイン」
塚はチョコの包みと世良の顔を見比べてぱつと吹き出す。
「なんスか？ なんて笑うんスか？ 超恥ずかしかったのに、それ買っの。でもまあ、一応？ つきあってっ？ イベントは大事にするのって俺のポリシーだし？」
「これ、昨日持ってきたのか？」
「ッス。そんで、塚さんにドタキャンされたショックで忘れてきまし

た」
「そりゃ、だってお前……」
塚は笑いながら世良がくれた包みのリボンを解く。有名なチョコレートショップのトリュフ詰め合わせである。
世良は「高いチョコレート」といえばこの名前しか知らない。
塚は目を細めて、ハートの形をしたチョコをひとつつまむと口に放る。
「チョコは栄養源として優秀だからな。美味いよ」
「俺の愛、って言ってほしいッスよ。まあ、愛がぶってましたけど」
世良がむくれて言うとき塚は笑った。
「お前わかっでないだろ？ 高価な生チョコは賞味期限が短くて、俺んどこに来るまでにだいたい処分されてるぞ？」
「え？ 手作りか？ 生モノがNGってだけじゃないんスか？」
「賞味期限が切れてるのは当たり前だし、手元に来た時点で残り少ないのも念のためはねられてるぞ」
ではあきらきらした本気感満載のチョコたちの多くは塚のところに届かないと言うのか。
(それはそれで気の毒なような……)
「けど、お前のは俺のとこまで届くからな。ちゃんと食べる」
世良は頷いた。塚は笑って顔をのぞき込んでくる。
「んで？ お前のとこのチョコはどうだったんだよ？」
「まあ、塚さんや別部屋用意の王子からすれば少しですけど。去年からは何十倍ももらいました。うれしいッス」
塚は目を細める。
「お前にチョコなんか送る物好きはどんな女の子なんだろうな」
「さあ……かわいいといっスよなえ。有里さんもまだ傾向つかめてないっばく教えてもらえなかった……」
まるで他人事のように世良は言った。塚はその言葉に微笑する。
「ほら、俺からだ」
実を言えば今日塚に会えるのは、すごくうれしかった。タベドタキャンされたのはちょっとへこんだが、今日あえるのならいいと思った。
世良の室内に甘いチョコレートの味が広がる。

ハレンタインデー。

それは恋人に贈る本命チョコの、一番正しい贈り方かもしれないと世良は思う。
唇が離れて、世良は言った。
「けど、俺は本命一筋ッスよ。ファンの人の気持ちはありがたいけど」
塚はそのことについては何も言わない。
「ほら、チラン寿司食うぞ。あ、監督のDVD流せよ。いつのダビングしてもらったんだ？」
「最後の2試合分ス。どっちから観ますか？」

今日はハレンタインデーだ。

まだまだ時間はたっぷりある。ここは世良の城の中で、並んで座るタイプのローソファは塚との距離をいとも簡単に引き寄せられる。
世良が塚に用意したチョコはまだいくつか残っている。塚の元まで届く、それは娯楽だ。
きっと自分はその全てを塚と分けあって味わうのだろう。その度にひとつひとつ丁寧にスイッチが入る。そうして世良は今日、チョコよりずっと甘いものを手に入れられるのだと確信する。

◆◇PLANET ZERO EVENT INFORMATION◇◆

セラサク小説、大体大人向け。

3/20 HARUコミックシティ 東2ホール南35a
5/4 SCC (申込済) 6/20 E T U ファン感謝デイ (申込済)
8/12 Comic Market80 (申込済)